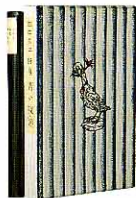


詩歌

ふくしまの

8 青い夜道

田中冬二
詩 昭和四年（一九二九）



いっばいの星だ
くらしい夜みちは
星雲の中へでもはひりさうだ
とほい村は
青いあられ酒を あびてゐる

少年がひとりぼっちでたどる夜道、風呂敷包みに背負った柱時計がねむたげに、寂しくリフレインする。「ぼむ ぼむ ぼうむ ぼむ……」。昭和期の代表的な抒情詩人田中冬二の処女詩集では、田園の風光をラムネのピンを透かして見るような淡い幻想として捕らえ、清爽の香りを放つ。

10 北窓

山本友一
短歌 昭和一六年（一九四一）

湯にくだるながき廊下になびき寄り日のくるま
で穂萱の光（岩代高湯）



著者は、昭和六年に旧満州に渡り満鉄に勤め、鉄道建設に従事した。終戦後の混乱のなか九死に一生を得て帰国、この間、『国民文学』同人として作歌し、これは第一歌集。以後十数冊の歌集を出版した。初版は昭和一六年であるが、昭和五一年に再版された。

兵ならぬ身のくやしきは胸さわき押ししづめつつ
爆撃されぬ

辛うじて吾はなぐさむ背後より陥れたることかつ
て無し

北窓の光にひろげ日毎しらぶかかると面も軍の機
密か



田中冬二（たなか・ふゆじ）
明治二七・一〇・一
三、昭和五五・四・
九、福島市生、幼く
して県外に転居した
が、昭和一九年八月
に安田銀行郡山支店
長となり二年六月
まで在勤、福島県内
の詩人たちと詩心の交流を深め大きな影響
を与えた。詩集「晩春の日に」で高村光太
郎賞受賞、福島県文学賞の審査員も務めた。

山本友一（やまもと・ともいち）
明治四三・三・七、福島市生、歌誌「地
中海」を創刊、昭和四九年から七年間、宮
中歌会始の選者をつとめた。「布衣」『日
の充実』等。

12 少年

金子兜太

俳句 昭和三〇年（一九五五）

作者二〇歳から三五歳に至る十六年間の作品四九七句を収録している。日本銀行に勤務し、昭和二六年から二八年までの福島支店時代の作品を、「福島にて」と題して掲載している。

会津の山々雲揚げ雲つけ稲田の民

裏庭蒼い銀行の夕暮を持ち帰る

17 深呼吸の必要

長田 弘

詩 昭和五九年（一九八四）

「団栗」という詩に、

団栗にはなぜかしら、いまはもうおもいだすこともできないような、幼い記憶の感触がある



とあるように、日常生活の中のものごとを通して、今では忘却してしまった私たちの成長期の心の在り方、行方などを、時間をとめるようにゆっくりと深呼吸しながら思索した、読者の心にしみこんでくるわかりやすい散文詩集である。

作者のこうした詩作の態度は、この詩集中に描かれた中国の詩人梅堯臣に通じていよう。

福島に関わる現代詩人には、詩集『孤島記』でH氏賞を受賞した粒来哲蔵、詩集『海の方へ海の方から』で第一回福田正人賞を受賞した若松丈太郎、詩集『われらを生かすものはどこか』で注目された福川方人などがいる。

29 智恵子抄

高村光太郎

詩 昭和一六年（一九四一）

あれが阿多多羅山あの光るのが阿武隈川

（樹下の二人）の一節）



智恵子は東京に空が無いといふ

（あどけない話）の一節）

これらの詩でよく知られる作品を取めた詩集。



最初の詩「人に」（大元）から最後の詩「荒涼たる帰宅」（昭16）まで詩二八篇と、歌六首、散文三篇を載せている。光太郎が、智恵子との出会い・恋愛・結婚、智恵子の発病から死までとその後をうたった第二詩集であり、彼自身「智恵子抄」は徹頭徹尾苦しく悲しい詩集であった」と述べている。

この詩集は、太平洋戦争直前の暗い世相、時代のなかで刊行され、多くの読者の心をとらえた。

56 海港

柳沢 健

詩 大正七年（一九一八）



柳沢健が北村初雄、熊田精華らと合著で刊行した詩集で、健にとつて代表的な詩集となる。『Yokohama Sentimental』という副題をもつこの詩集は、ヨーロッパ近代の詩の香りに満ちており、健に限つていえばフランスの詩人ポール・フォールの影響をつよく受けた詩が多い。

63 磐梯

水原秋桜子

俳句 昭和一八年（一九四三）



秋桜子は自然への憧憬を現実の自然の中から彫り出し、独自の自然風景を創り出した。これは昭和一七年から一八年までの句集で「磐梯山の秋」の題で二五句が入っている。

高空に草紅葉せり火口壁

山葡萄むらさきこぼれ山日和

金子兜太（かねこ・とうた）



大正八・九・二三、埼玉県生。「寒雷」同人となり加藤楳都に師事。後に「海程」代表となる。道型俳句から前衛俳句へと走ったが、自らの意志の要するを賭けており、現代俳壇の第一人者である。

長田 弘（おさだ・ひろし）

昭和四・一・二〇、福島県生。現代評論家。六〇年代に登場した代表的な現代詩人の一人で、詩論集『抒情の要諦』（昭40）、処女詩集『われら新鮮な旅人』（同）などの著作がある。

高村光太郎（たかむら・こうたろう）



明治三・一・四、東京生。処女詩集『道程』を大正三年に刊行、この年一月に、福島県安達郡油井（ゆい）村出身で画家の長沼智恵子と結婚する。この二人については佐藤春夫が小説『智恵子抄』（昭33）でも描いている。

柳沢 健（やなぎさわ・けん）

明治三・一・三、昭和二八・五・二九、会津若松生。詩人外交官として知られ活躍する。処女詩集『栗樹園』（天33）、評論集『現代の詩及詩人』（天9）などとともに、紀行文集『随筆集』も数多い。

水原秋桜子（みずはら・しゅうおうし）



明治二五・一〇・九、昭和三六・七・一七、本名豊。三〇歳で「ホトギス」の選者となり、昭和八年に「馬酔木」を主宰、独自の清麗典雅な句境をつくった。昭和三九年には日本芸術院賞を授けられ、医師で宮内府侍医兼御用掛も勤めた。

渡部信義（わたなべ・のぶよし）

明治三・九・五、昭和六三・一一・二〇、会津高田町生。詩集に「土の言葉」、（昭15）『日本田園』（昭39）などがある。

72 灰色の藁に下がる 渡部信義

詩 大正一四年(一九二五)

土に根ざして、最下層の生活を生きるしかなかった農民の生活感情をリアルに描き出している。第二次世界大戦後には、初期プロレタリアの詩として高く評価された。



77 乙字句集 大須賀乙字

俳句 大正一〇年(一九二一)

青嵐こたな蚕棚を払ふ天気かな

木移りの栗鼠りすの影とぶ冬の月

道遙かに荒海に沿ふ寒さかな

など、明治三六年以降の全作品を収めた句集。

最初の句には、「一時農民俳句とよばれた傾向が、後の二句には「我を没して自然に参入せよ」と唱えた作者の俳句観がそれぞれうかがえる。とくに終わりの句は没年の作で、その自然描写には、四〇歳をまたずに洋々たる前途を残して逝った乙字の内面が見事に重ねられている。

93 雲 山村暮鳥

詩 大正十四年(一九二五)

おうい雲よ

ゆうゆうと

馬鹿にのんきさうぢやないか

どこまでゆくんだ

ずつと磐城平の方までゆくんか



○智恵子の生家

○安達大良山

○もりあお蛙の棲む平伏沼



の詩「雲」で知られる詩集。「序」に詩を書くときは「偉大な拙さ」を求めるとあるように、短かく読みやすい詩一二三篇を収める。

この詩は平で出していた雑誌『みみづく』に載せたもので、佐藤久弥が発見し、昭和四一年に初めて全国にむけて発表された。暮鳥が茨城県磯浜で作った詩である。

94 移住民 猪狩満直

詩 昭和四年(一九二九)



家族との不和から、二度にわたる北海道阿寒へ開拓者として移住する。その間の希望と苦渋とに満ちた生活を記した詩集が、『移住民』(昭4)で、最も高い評価を得、よく知られている。詩集『秋の通信』(昭9)では、帰郷後の現いわき市小島町での生活が記されている。没後久しくして『猪狩満直全集』(昭61)『猪狩満直詩集』(平元)が出版され、広く作品が読まれるようになっていく。

96 定本 蛙 草野心平

詩 昭和三年(一九四八)



蛙の詩人草野心平が、蛙を描いた自分の詩から約四分の三を選んだそれらを収録した詩集。「秋の夜の会話」や、●だけの「冬眠」と題された詩や、「る」の文字一行からなる詩「春殖」などがある。

題字は高村光太郎、写真は土門拳、絵は福沢一郎、岡鹿之助、三岸節子らで、詩集の終わりの部分には、深井史郎が作曲した「蛙・祈りの歌」(作詩は心平)の長い譜面も掲載されている。

大須賀乙字(おおすが・おつじ)



明治二四・七・二九
大正九・一・二〇
○、相馬生、父鶴軒は郡長、漢文教授などに任せられた漢学者で漢詩を多く残す。乙字は小学校時代を平で、中学校時代を郡山ですす。明治三七年河東碧梧桐門に入り、四一年には新傾向俳句大流行のきっかけをつくる論文を発表した。死後に「乙字俳論集」(大10)と「乙字書簡集」(大11)も刊行された。

山村暮鳥(やまむら・ぼちよ)



明治一七・一・一〇
大正一三・一・二一
八、群馬県生、大正元年から八年までと、大正九年に平に住む。最晩年に書いた小説「鼯鼠(もぐら)の歌」では磐城の地主を登場させている。

猪狩満直(いがり・みつなお)



明治二一・五・九
昭和一三・四・一六、現いわき市好間町生。貧苦の人生のなかで、優れた農民詩を書き続けた。大正一一年には草野心平、三野混流らと雑誌「播種者」を刊行している。

草野心平(くさの・しんぺい)



明治三六・五・一一
昭和三三・一一・二二、いわき市小川町生。福島県を代表する現代詩人で、私家版を含めて三九冊の詩集を刊行。心平の詩集は世界的なスケールに達している。第一詩集「第百階級」(昭3)より蛙が登場している。詩集「乾坤」(昭5)では少年時を思慕、阿武隈の空がうたわれている。